

## 『レオン 960 年の聖書』対観表の福音書記者像表現

毛塚実江子（早稲田大学大学院）

960年にイベリア半島北部で制作された聖書（Archivo Capitulare de la Real Colegiata de San Isidoro de León, Cod.2、以下『960年の聖書』）は、旧約聖書、新約聖書のテキストと挿絵を含む大型聖書写本である。同写本はコラムピクチャー形式による92点の旧約聖書挿絵で知られているが、新約聖書には、4点のパウロの肖像を除いて、ナラティブな挿絵は含まれていない。同写本の対観表は新約聖書の冒頭に17フォリオに渡って配され、福音書記者像は、表を縦区切るアーチと、外枠アーチの間のリュネット部分に描かれている。福音書の章節を記述した対観表においては、それぞれに福音書記者像が描かれるのだが、『960年の聖書』においても、福音書記者像は、それぞれの象徴の姿あるいは獣頭人物像（anthropomorphic form）によって描かれている。この獣頭人物像タイプの福音書記者像はイベリア半島の写本挿絵において多く見られ、それぞれが、視線を交差させ、あるいは互いに顔を向けて向かい合う、「会話」をするような形で描かれている（ウィリアムズ）。注目すべきことに『960年の聖書』においては、それらの象徴は、例えば、獣頭人物像であれば「両側の人物が中央の人物に向かって手を伸ばす」（f.398v.）様子や「互いに身を乗り出している（f.400r.）」様子、「左手で相手の右手首を掴む」（f.400v.）といった活発な身体表現で描かれている。獣や人といった象徴として描かれている場合においてもまた、「獅子の前脚に嘴を近づける鷲」（f.399v.）、「人物が槍を持って牛の目を突く（f.400v.）」、「盾のような四方形を掲げた人物に後ろ脚立ちになって襲いかかるような獅子（f.401v.）」といった表現が取り入れられている。このような福音書記者像の表現は、先行する聖書作例はもとより、他の写本においても例を見ない挿絵である。これらは、どのような意図によって制作され、どのような象徴的な意味がこめられているのであろうか。「四福音書記者の一致」等の神学的な論争に基づくものなのか、イソップ寓話やフィシオロゴスなどの動物寓意表現の挿絵伝統によるものなのか、対観表の屋根部分にしばしば描かれる狩猟図などのバリエーションであるのか。そしてこれらと、対観表で表示されたそれぞれの福音書の記述箇所には何らかの対応関係が見られるのだろうか。

以上のような観点から、先行作例である聖書の対観表をはじめ、同じ挿絵師フロレンティウスによる他の写本作例、『960年の聖書』の、他の主題の人物と図像を詳細に検討し、これらの福音書記者表現が、単に図像の単調さを避けるためだけでなく何らかの象徴的な意味を担っていたことを指摘し、同写本の中での対観表の役割を再考する。そして、対観表に限らず、福音書記者表現と身体表現という二つの視点から、同時代のイベリア半島で盛んに制作されたベアトゥスによるヨハネ黙示録写本群および、それに大きな影響を与えていたカロリング朝の福音書写本とを比較し『960年の聖書』との関係を明らかにしたいと考えている。

（早稲田大学大学院博士後期課程）